



修道中学校・修道高等学校

〒730-0055 広島県広島市中区南千田西町8-1 TEL.082-241-8291
<https://www.shudo-h.ed.jp>

建学の精神「道を修めた有意な人材の育成」は、建学以来、脈々と受け継がれる修道中学校・修道高等学校の教育の柱となっている。1725(享保10)年の「講学所」創始時にはすでに「学問は自分の身を修めるもの」という教学の精神が示されており、1881(明治14)年、浅野長勲(ながこと)が好調の山田養吉(十竹:じっちく)に「道徳を修むるを以つて本校の主義とすべきこと」「生徒の品行を正すべきこと」と教学の方針を示している。この建学の精神を実現するため、同校は、教学の目標として「知徳併進」を、その実践に向けた心得とし

て「尊親敬師」「至誠勤勉」「質実剛健」を掲げている。また、同校では6年間の一貫教育で「自治向上の精神」を培う。生徒は「今、自分は何をなすべきか、何が最も大切なことなのか」を自覚し、他者との関わりの中で自らを律し、自主性を身につけていく。「責任ある自由」という言葉が示すように、細かな規則で縛らず、学年が上がるごとに生徒の裁量が増す自由な校風は、生徒一人ひとりの自主的で正しい判断に基づく行動に裏付けられた、自治向上の精神が生み出している。

建学の精神の具現化 ～ルーブリックの作成と活用～



修道中学校・修道高等学校
校長

田原 俊典 先生

校長として様々な教育改革を進める中で、2015年度に修道中学校・修道高等学校のブランディングの一環として、「建学の精神の具現化」という課題を全教職員に提示した。当時の広島県教育委員会の「新しい学びのビジョン」という教育改革に対峙して、私学としての独自性を発揮するには、「建学の精神の具現化」は必須の条件であると考えた。

その考えがルーブリックを作成する契機となり、2017年度までの約3年間は先進校の視察や、ルーブリック作成に成果を出している教育コンサル会社の調査等を進めた。選定したコンサル会社の指導の下、2018年度に作成プロジェクトメンバーを、校長1名、中高教頭2名、教頭補佐1名、各部署の部長4名の計8名と決定し、2019年度中に「修道ベーシックルーブリック」(以下 SBR と表記)を完成させた。

本校の建学の精神である「世に有為な人材の育成」の意味を、現代に即して「グローバルリーダーの育成」と換言し、作成プロジェクトメンバーの各自が考える「理想とする生徒像・リーダー像」を1人につき最低20以上の単語・短文でカードに書き出した。そのカードをKJ法により分類した後、「価値観」「スキル」の2つの観点に分けて、その元に9つの領域に23のテーマを設定し、現在活用しているSBRを作成した。



2020年作成・
修道ベーシック
ルーブリック

年度内の9月と3月(高3は12月)の2回、校内において全校生徒が自己評価をする時間を設定している。生徒の回答したデータを、その都度提携している教育コンサル会社を集計・分析を依頼し、全教員がその結果説明を聞く研修会を開催している。その研修会を受けて、各学年会は今後の課題や具体的な施策を協議し、その結果をレポートにまとめて、全教員が情報共有できる学内のネットワーク上に提示している。

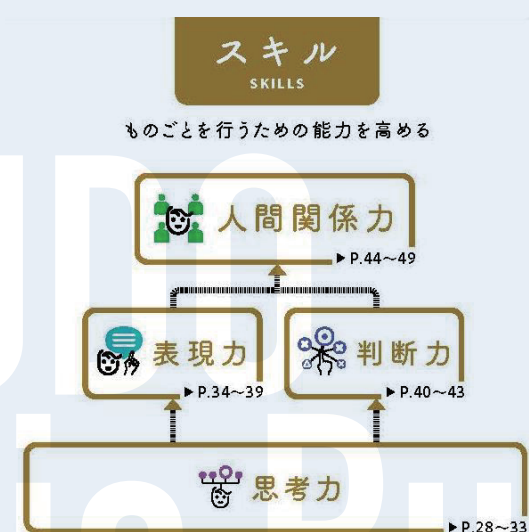
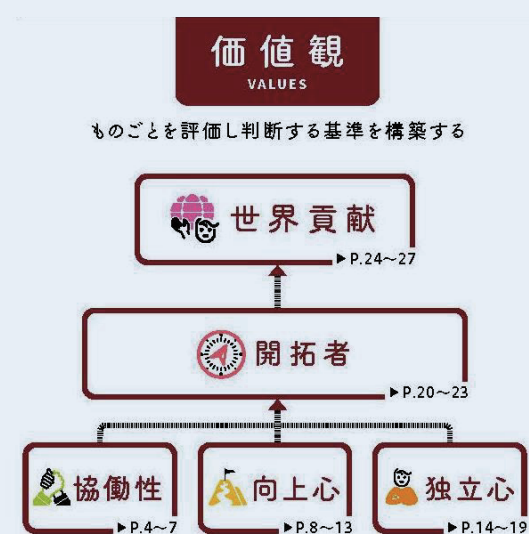
現在では、本校の年度事業計画・報告(毎年理事会で承認を受け、評議員会で審議されるもの)の内容にもSBRのキーワードが頻出している。また、各学校行事等もSBRと関連させてその教育内容や目標が述べられるまでにSBRは浸透してきた。今後の展望としては、生徒の成長に関連する様々な教育現場の事象の中で、教員同士、教員と生徒、または保護者との面談などにおいても、日常的にSBRの内容が語られる風土を創っていきたいと考えている。

今後は、全国の私立学校においても、自校のブランディングのためにルーブリックの作成に着手する学校が増えてくると考える。本校のSBRの活用について視察を要望される私立学校も年々増加している。最後に、本校のHPにはSBRの内容をすべて公開していることを紹介しておきたい。

修道ベーシックルーブリックとは

「価値観」と「スキル」の2つの観点から示された「**修道生として目指すべき姿**」に向かって、生徒が自分の**力で成長していく**取り組みです。「世界貢献」や「人間関係力」など9つの領域に23のテーマがあり、**自分のレベルを高めるために必要な姿勢や行動**がわかりやすく示されています。

毎年2回、自分の言動や行動をテーマごとに振り返り、「修道生として目指すべき姿」にどこまで近づいているかを5段階の指標で確認します。**自分の「現在地」を定期的に把握し、6年間で着実にレベルアップ**を重ねていきましょう。



<https://gakugai.shudo-h.ed.jp/basicrubric-top.html>

(出典：2020年作成・修道ベーシックルーブリック)

修道中学校・修道高等学校 補足資料

修道中学校・修道高等学校の「修道ベーシックルーブリック(SBR)」では、評価項目が、大きく「価値観」と「スキル」の二つの領域で構成されています。そして、「価値観」領域の最上位に「世界貢献」、そして「スキル」領域の最上位に「人間関係力」が掲げられています。この二つの領域の資質・能力が、それに必要

な資質・能力の下層から上層へ向けたピラミッド構造で表現されています。例えば、価値観の領域では、最下層に協働性、向上心、独立心、中位層にそれらを踏まえた上で開拓者という評価項目、そしてそれが最上位層の世界貢献へと関連付けられているという独自の構造で表現されています。

「世界貢献」の項目では、生徒が国際社会や自身を育ててくれた社会に対して貢献する意識を育むことが目標として置かれています。この最上位層の達成目標も2つのテーマ(国際課題への関心、社会への恩返し姿勢)に分かれており、それぞれで生徒の発達段階を5段階で評価する構成になっています。最終段階では、国際課題の背景や解決方法を探究し、自分たちの世代が果たすべき役割を考え、行動に移すことが目指されています。さらに、自身のコミュニティへの貢献を主体的に考え、積極的に行動する姿勢を醸成するように達成基準は表現されています。同校の「世界貢献」の価値観領域における期待される卒業生像は、「世界貢献に向けて積極的に行動する人」といえるでしょう。

生徒たちは、自分が属するコミュニティに積極的に貢献し、その延長線上で広い社会に対しても貢献できるような意識と行動力を養うことが目標とされています。特に、「相手の顔が見える集団」で貢献することで、人間関係の中で自己の役割を自覚し、その力を育てた上で、それが社会全体さらに国際的な「顔が見えない集団」に対して貢献する力に繋がり、最終的には「世界貢献」に向けた積極的な行動を促すといった構造的に関連した資質・能力として表現されています。このような価値観を身につけた生徒は、与えられた課題に取り組むだけでなく、自分の意識を変革し、行動を通じて社会的責任を果たし、その結果、より広い社会に対しても貢献できる人間となることが期待されていることが読み取れます。

「価値観」領域のルーブリックの一例

世界貢献					
Theme 2	1	2	3	4	5
自分を育ててくれた社会に貢献しようとする姿勢 自分を育ててくれた社会に対して、どのような貢献ができるかを考え、行動しようとする姿勢	チームで活動する際、自分から意見を発信することができない。または発信しても聞いてもらえないことが多い。	自分の意見を聞いてもらえることはあるが、自分の意見を取り上げてもらえることは非常に少ない。	自分の意見を集団の中で採り上げてもらえることが多くある。	③ができた上で、複数の意見が対立した際、全体が同意しやすい意見を示すことで、対立関係を修復することが多くある。	④ができたうえで、集団全体の士気を高めるために、一緒に活動する仲間一人ひとりが思い入れの持てる目標を示し続け、結果の良し悪しに関係なく、多くの感動を勝ち取ることがある。

一方、「スキル」領域は、思考力、判断力、表現力を統合した資質・能力として最上位層に「人間関係力」が設定されています。この上位の人間関係力の評価項目は、リーダーシップ、自己の言動への洞察力、他者の価値観を理解するコミュニケーション力の3つのテーマに分類され、各テーマにおいて5段階の評価基準が設定されています。

人間関係力の評価基準の記述内容から、同校が期待する卒業生像は、他者を巻き込むリーダーシップを持ち、他者に対する感受性と共感性が高く、多様な価値観を受け入れる柔軟な人間といった特徴を想定していることが伺えます。

修道ベーシックルーブリックの特筆すべき特色

は、評価基準の記述が、具体的で実践的な内容が含まれている点です。生徒が日常の人間関係や対話を通じてスキルを磨けるよう、段階的な基準が具体的な行動として記述されています。評価基準が「単なるスキルの有無」にとどまらず、他者との深い相互理解や共存を目指す内容である点は、これからの社会で求められる多文化共生や対話の重要性を反映しているといえるでしょう。このようなルーブリックを用いることで、修道の教育活動では、生徒一人ひとりが対話力や協働力を備え、多様な価値観を持つ他者と共に生きる力を身につけることを目指していると明確に表現しています。

「スキル」領域のルーブリックの一例

人間関係力					
Theme 1	1	2	3	4	5
リーダーシップを発揮し、周囲が力に合わせてものごとに取り組めるようにする力 明確な目標を示し、周囲の同意を得た上で、目標の実現に向けて一体感をもって先導する力	チームで活動する際、自分から意見を発信することができない。または発信しても聞いてもらえないことが多い。	自分の意見を聞いてもらえることはあるが、自分の意見を取り上げてもらえることは非常に少ない。	自分の意見を集団の中で採り上げてもらえることが多くある。	③ができた上で、複数の意見が対立した際、全体が同意しやすい意見を示すことで、対立関係を修復することが多くある。	④ができたうえで、集団全体の士気を高めるために、一緒に活動する仲間一人ひとりが思い入れの持てる目標を示し続け、結果の良し悪しに関係なく、多くの感動を勝ち取ることがある。



[修道中学校・修道高等学校 | 解説・インタビュー]

夢と誇りを持った志士を育てる私学

2024年7月中旬に日本私学教育研究所の担当スタッフと共に、グランドルーブリック(修道では、修道ベーシックルーブリックと呼称)に関するインタビューを行うために、広島県の修道中学校・修道高等学校校長の田原 俊典先生のもとへ伺いました。田原校長については、日本私学教育研究所主催の研修会での講演を拝聴したことがあり、その豪胆でユーモアあふれる独特の人柄は以前からよく知っていました。

今回の訪問は、「私学らしい教育の具現化」を果たしている先駆的な私立学校の西日本の代表(東日本は、前述の福島県の学校法人石川高等学校・石川義塾中学校)として、その独自の私学らしい教育を大きく前進させた個性で魅力的な修道ベーシックルーブリック(以下、SBRと記述)の作成や運用に関するお話を詳しくお聞きすることが目的でした。



江戸から令和まで修道300年の歴史(筆者撮影)

広島駅から車で15分ほどの広島市中区に修道中学校・修道高等学校(以下修道中高と記述)があります。その歴史は大変なもので、1725年(享保10年)に創始された講学所(藩校)を起源とし、その後、講学所から講学館、さらには学問所、修道館と名を変えながら明治になり修道学園として、その伝統を脈々と継承している中高一貫の私立男子校です。私立学校では数少ない藩校を起源とすることから、2025年にはなんと創始300年を迎えるということです。その卒業生は、広島のみならず全国の各界で活躍されており、私立高校では珍しく同窓会組織は、全国的な規模で地域支部のみならず職域支部(修道医会など)もあり、様々な周年行事の際には、この同窓会の手厚い支援があることも修道の特徴の一つといえるでしょう。多くの政財界人の他に、卒業生には、古くは漢詩人の頼山陽、日本画家の平山郁夫といった文化人も多数輩出しており、その重厚な伝統は、広島県内外で修道高校の名を不動のものにしています。

この伝統的な学校では、その起源が藩校であったことから、建学の精神は「道を修めた有為な人材の育成」であり、教学目標としては「知徳併進」を掲げ、その実践に向けた心得として「尊親敬師」「至誠勤勉」「質実剛健」を実践綱領として掲げられています。「はじめに」で書きましたように、伝統校であればあるほど、建学の精神や教育目標は、古風かつ難解な表現となっています。令和の今、「知徳併進」だけでは、生徒も保護者も、その具体的な教育指針を理解しづらいのではないのでしょうか。この建学の精神(いわゆる創立の志)をより、分かりやすく、学校関係者が共有できるよう、明快な教育方針を作成しようと構想されたものが「SBR」という名称のグランドルーブリックです。

田原校長と二人の教頭先生も同席されて、和やかな雰囲気の中でインタビューは始まりました。ルーブリックの話題を中心に、時には保護者や同窓会組織、また生徒や教職員との日常的な関わりなど、修道教育の様々な面に話題が及びました。田原校長のユーモアあふれる説明に、時には大声で笑いながらも2時間ほど熱の入ったお話を伺うことができました。その詳細を紹介するとともに、



SBRのユニークな特色について解説させていただきます。

まず、ループリック作成の経緯をお聞きしたところ、田原校長の紹介文に書かれていますように、新学力観や非認知能力が注目され始めた2015年頃、田原校長が様々な教育改革を進める中で、修道中高のブランディングの一環として「建学の精神の具現化」という課題を全教職員に提示されたということです。これを契機としてループリック作成が決まり、2017年度までの3年間は先進校の視察や教育コンサル会社の調査等を進められ、2018年度に田原校長のトップダウンで、作成プロジェクトメンバーを、ご自身を含め中高教頭2名、教頭補佐1名、各部署の部長4名の計8名と決定し、2019年度に数ヶ月に渡る集中的な議論を重ねSBRが作成されたということです。

具体的なループリックの作成作業では、建学の精神である「世に有為な人材の育成」を、現代に即して「グローバルリーダーの育成」と換言され(いわゆる建学の精神の再創造、再定義と解されます)、メンバー各自が考える「理想とする修道の生徒像・リーダー像」を1人につき最低20以上の単語・短文でカードに書き出し、そのカードをKJ法により分類した後、「価値観」「スキル」の2つの観点に分けて、それを元に9つの領域に23のテーマを設定し、現在活用しているSBRを作成されたということでした。インタビュー時に、プロジェクトチーム時代の各種の資料を見せていただきましたが、数ヶ月に及ぶ真剣な議論(激論)の後がはっきりと確認できるものでした。田原校長も教頭先生も「あの時は辛かった」「宿題を大量にやらされる生徒の苦勞がよく理解できた」「しんどかった」と笑顔の中で当時の真剣に議論されていた頃を振り返られていました。SBRの一つの特徴でもある資質・能力項目を象徴しているピクトグラムも修道中高の先生のオリジナルデザインで作成されたということです。修道中高の特色ある教育をより鮮明に打ち出すために、情熱や才能を持ったプロジェクトチームがループリックづくりの苦勞を共にし、協働でやり切った達成感、修道中高の執行部の一体感をさらに強めていることを感じました。

このように学校のリーダーが結集して、自校の将来や

求める生徒・卒業生像、自校らしさなどについて真剣に議論を重ねること自体が、グランドループリックづくりの醍醐味でもあり、その学校にとって最も大切な教育方針(ベクトル)を揃え共有する(納得する)という意義深い作業(産みの苦しみ)なのだと確信した次第です。

出来上がったSBRについて、有志生徒による試行的評価を行ったところ、その分析結果が、ある程度偏りが無いことを確認した上で、ループリック評価の全校実施を決定し、教員研修を通じて教職員の理解を促し、導入に踏み切ったとのことでした。

導入初期には、「受験対策に注力すべきで、SBRに懐疑的な教職員」も一部に見られたそうです。しかし、そのような教員に対しては、田原校長ご自身が「受験対策の知識を無理やり詰め込むような教育は、古い教育だ。詰め込み教育の効果は限定的であり限界がある。修道生らしく自ら学ぶ姿勢をSBRで育むことこそが、本当に生徒を伸ばす教育であり、限界を突破できる修道らしい教育だ」と様々な機会を通じて説得されたそうです。また、同趣旨の説明を生徒にも複数回、説明したということでした。さらに、保護者に対しても校長講演会を通じて「修道らしい教育にさらに磨きをかける具体的な教育目標がSBRである」ことを繰り返し伝えたそうです。

学校の教育方針(ベクトル)を定め、すべての関係者である教職員、生徒、保護者の意識を揃え、共有するために校長自らが汗をかかれたこの経緯のお話は、修道という分厚い伝統を持つ学校であるからこそ、その大きな船の進路を定め、その進路に向かうため大きな船の進路を変えるには、大きな力(多くの関係者の理解と協力)が必要であること、そのためには関係者を巻き込んでいく強力なリーダーシップ(キャプテンシップ)が必要なことがよく理解できるお話でした。

SBRの日常的な活用(運用)の実態についてお聞きしたところ、「初期には、SBRのデータをクラス別、学年別に分析したり、部活別のデータを比較したりするなど、教育実態の分析のツールとして活用し、次の目標設定に活用していた」ということです。今では「年2回、全校生徒が自己

評価を行い、回答されたデータを教育コンサル会社に集計・分析してもらい、全教員がその分析結果の説明を聞く研修会を開催するとともに、クラス担任は、個人毎の個表を元に、生徒一人一人の面談で、次の目標を共有するといった普段使いが定着してきた」ということでした。

授業場面以外での活用に関してお聞きしたところ、「授業デザイン研修(教科主任や就任3年以内の教員研修)においても、ループリックの評価項目を意識した授業作りを求めている」ということで、教員研修もSBRに則って実施されているとのことでした。さらに、年間指導計画の作成時にも「ループリックを活用し、学校行事や修学旅行、海外研修などもその改革議論を行なっている」また、「修道中高独自のFLP(未来のリーダープログラム)もこのループリックを意識してデザインしている」さらに最近では「年度事業計画・報告にもSBRのキーワードが頻出するほどに、修道の教育活動全般の細部から大局までSBRは浸透してきている」とのことでした。今後は、教員同士、教員と生徒、または保護者との面談などでも「日常的にさらにSBRの内容が語られる風土を創っていきたい」と学校の未来を見据えた夢を語られていました。

田原校長曰く、「業者の提案や他校の模倣ではなく、自分たちで苦勞して0(ゼロ)から手作りで作ったループリックだからこそ、思い入れもあり、大切にしている」と、自作ループリックに対する深い愛着を持たれている様子でした。また、「結局SBRは、スクール・ポリシー(具体的にはグラジュエーション・ポリシー)の役割を果たしている」とのことで、修道生に期待する資質・能力のあるべき姿を具体的に記述した評価規準を共有することが、生徒と教員の教育方針を揃えることに大いに貢献していることを実感されている様子でした。

SBRが、生徒の自主性や自ら学ぶ態度を育成した具体的なエピソードの一つとして、「自ら学ぶ姿勢を育むためには、仲間との対話や切磋琢磨が必要だから、一人で勉強するための静かな図書館ではなく、仲間と議論ができる図書館を作ってくれ」と有志の生徒が校長に要求してきたことがあったそうです。その主体的で前向きな生徒の姿

勢に応えるべく、学校も一部の施設を学び合いスペースとして確保した、とのことでした。

この話を聞いた時は、私(広石)から海外のPBL校や先進的大学においては、従来の一人で読書することを前提とした図書館から、対話して協働的に学ぶラーニングコモンズという新たな学びのスペースがどんどん広がっていることを説明させていただきました。人間関係力を育み、自主的、協働的、対話的に学ぶことを推奨しているSBRの具体的な成果として、(生徒自身は知らないであろう)世界の最先端のラーニングコモンズを創ってくれという要求を出してくること自体が、SBRによって修道らしい自主的で協働的な学びの文化が醸成されつつあることを感じさせるエピソードでした。

SBRの作成の経緯、その運用の実態、その効果などについて一通り説明を聞いた上で、私から何点か、SBRに抱いていた疑問点について、深掘りの質問をさせていただきました。まず初めに聞いたことは、「SBRは、大変、魅力的で独創的なキーワード(開拓者や世界貢献など)で構成されている。さらに、評価基準の記載を読むと、一般の大人でも達成が極めて難しい行動が記載されているようだ、この高い要求水準は、生徒や教職員にとって過剰なプレッシャーには、なっていませんか」というものでした。

具体的に説明すると人間関係力のテーマ2(リーダーシップ:明確な目標を示し、周囲の同意を得た上で、目標の実現に向けて一体感をもって先導する力)の評価5を獲得するための行動基準には、「自分の意見を集団の中で採り上げてもらえた上で、複数の意見が対立した際、全体が同意しやすい意見を示すことで、対立関係を修復することができ、さらに集団全体の士気を高めるために、一緒に活動する仲間一人ひとりが思い入れの持てる目標を示し続け、結果の良し悪しに関係なく、多くの感動を勝ち取ることがある」という行動が示されています。「正直なところ、このような行動は、私自身(広石)できませんし、多くの大人も難しいのではないですか」といった素朴な質問でした。この私の問いに対して、田原校長は満面の笑みを浮かべて「私自身(田原校長ご自身)こんな行動ができるわけ



ありませんよ。できるわけ、ないじゃないですか!こんな高い目標達成は、多くの大人でも無理ですよ」とはっきりと言われました。そこで、私(広石)から「では、なぜこのような高い行動目標を設定したのですか」と、この独特な評価項目と難易度の高い行動目標の設定の真意をお聞きしました。

すると、田原校長は、以下のように説明されSBRに期待している役割を説明されました。「修道は、男子校です。男子には、気持ちを昂(たかぶ)らせる必要があります。世界貢献や開拓者といった夢のある言葉を用いて、夢を持たせる。気持ちよくさせる。これが重要です。ちょっと勘違いする程に、気持ちを高揚させると、彼らはやる気をだします。本校の生徒には、勘違いして、夢見て頑張ることで、自らの殻を破ってもらいたいのです」とその真意を解説されました。つまり、あえて意識的に大きな目標を掲げ、高い行動基準を示すことで、生徒の未来への志や夢を刺激して、気持ちを高揚させることが男子校には必要であり、男子校にしかできないサポートのやり方である、との説明でした。

純朴な中高生の男子だからこそ、夢ある言葉を投げかけ、高い目標を示すことで、気持ちを高揚させ、前向きな主体性や積極性を引き出すことができる、という田原校長のお考えを聞いて、共学校や女子校にはない「男子校ならではの生徒への支援のあり方」に気づかされ、なるほどと目から鱗が落ちた次第です。SBRに示されている評価項目(世界貢献や開拓者)は、重厚な歴史を持ち、数々の有名な卒業生を要する伝統のある男子校であるからこそ出てくる言葉だとも解されます。また、その評価基準が極めて高いことは、男子校ならではの言葉がけであることが理解できる説明でした。この田原校長の説明によって、SBRがなぜ圧倒的に個性的で魅力あるものであるのか、その輝きの根本的理由が腑に落ちた次第です。

この話の際に、男子校ならではのエピソードをお聞きすることができました。田原校長が、中学校の卒業式の式辞(中高一貫校なので、高校の卒業式は保護者も参加する式典ですが、中学校は、簡易的に在校生だけの集会)で、

事前にあまり考える余裕もなく、一言、中3生に向かって「カッコいい男になれ!」という言葉が話されたそうです。その「カッコいい男になれ」という言葉は、瞬刻間に学校中の生徒の間で話題になり、いつしか、生徒みんなの中で「カッコいい男になれ」が決め台詞のように流行ったそうです。一例として卒業生の吉川晃司氏が来校された時も、吉川氏の講演の後に「カッコいい男になるには、どうしたらいいですか?」といった質問が生徒から飛び出す始末だったということです。

この話を聞いた時に、私は田原校長に「先生は、世界貢献や開拓者、カッコいい男になれ、など短い言葉で、生徒に夢や志を持たせる『修道生のプライドの種』をまかされているんですね」と言ったところ、「いい事言うね!それ使わせてもらおう」と大笑いされていました。また、私から田原校長に「田原校長の言葉の掛け方、生徒のそれに対する反応のエピソードなどをお聞きしていると、藩校に起源があるからか、まるでこの学校(修道中高)は、幕末の維新の志士を育てた私塾の様ですね」と感想を述べると、「いいこと言うね!」とまんざらでもない様子でした。

男子校ならではの、夢のある言葉に素直に反応する生徒、その生徒たちの志や夢を刺激すべく、短い魅力的な言葉をユーモアたっぷりにお話しされる豪胆な校長(私の中では、田原校長は、西郷隆盛を連想する印象です)、まさにSBRは、この修道の重厚な歴史、素直な生徒、豪快な校長が生み出した、どこにもない修道中高ならではのグランドループリックになっていることを深く納得したインタビューとなりました。

ここで改めて修道中高のSBR(修道生として目指すべき姿)を外観すると、(ものごとを評価し判断する基準を構築する)価値観と(ものごとを行うための能力を高める)スキルの2観点で様々な資質・能力が体系的に整理されています。また、価値観の最上位には「世界貢献」、スキルの最上位には「人間関係力」といった用語を用い、その下位の様々な資質・能力が統合されて人間の行動として発揮された場合の具体的行為の質や目標が連想される

短い言葉で表現されています。

育成を目指す資質・能力(コンピテンシー)を表現する際に、価値観とスキルの2領域に分割して表現する手法は、先に挙げた学法石川も同様であり、学法石川では、普遍的な価値観に関する評価項目を「建学の精神ループリック」、現代人に求められる汎用的スキルに関わる項目を「生きる力のループリック」として表現されていました。私学らしい人間教育に深く関わる価値観の領域を丁寧に表現され、学校関係者の共有すべき教育方針にしようとする「私学らしい教育」を支えるグランドループリックでは、この「価値観」に関わる評価項目は、各校の建学の精神を具現化するという観点から、必須のものであることが先駆的な学校の事例からも確認できます。

実は教育学の視点からは、人間の様々な資質・能力を表現する際には、3領域[知識、スキル、人格や知識(Knowing)、能力(Doing)、資質(Being)など]に分類することが一般的であり、それを表現する場合も、ベン図などを用いて「入れ子構造」の能力として表現することが一般的です。しかし、私立学校の求めている「育成を期待する資質・能力」を簡潔に表すグランドループリックにおいて「社会的に価値あることを為す人材の育成」という大きな目標を共有する私立学校では、第一に建学の精神が最も色濃く反映できる「価値観」の評価項目と、それを現代社会で実現していくために必要な様々な実践的「スキル」の2つの項目が、大きく取り上げられることは、自然なことだと考えられます。教育学的に見た場合の資質・能力の分類と、私立学校のグランドループリックの評価視点として見た場合の資質・能力の分類に関するこの問題は、最後の「まとめと展望」において、改めて解説させていただきます。

実は、「教育学では、一般的に資質・能力を表現する場合は、3観点が多いです」と私が、資料(OECDのラーニング・コンパス2030や21世紀型能力の能力図)をお見せしながらお話ししたところ、田原校長は、「私は普段から、人間に大切な創造性や批判的思考力と言ったものは、基本的な知識がないと育たない。創造性は、もちろん大切

な能力だが、その前提には知識が必要であり、何事にも基本的学習習慣や基本的生活習慣がないと、どんな力も身につけることはできない」と徹底して中学生に話しているとのことでした。また、その徹底ぶりのエピソードとして「中学で入学して、未だ基本的生活習慣や基本的学習習慣が不十分な中1生は、夏休みに寺で修行(約50名が参加、保護者の希望も多いとのこと)を実施して、基本的生活習慣を徹底して教えるとともに、知識の重要性を、しっかりと学ばせている」とのことでした。また「中学時に、知識の重要性を徹底的に学ばせているので、SBRでは、それは当たり前のこととして評価項目には入っていない。他校では、学習習慣や生活習慣までもループリックの項目に設定しているところがあるのは承知しているが、修道ではそれは不要と考えている」との明快な回答をいただきました。

保護者会で田原校長は、「教育の真の受益者は、生徒本人ではなく、ましてや保護者でもありません。彼らが社会貢献できるようになった未来の社会こそが、教育の真の受益者です。ですから、保護者の個別的な要望は、一切お聞きしません」と宣言されるとのお話をお聞きしました。夢や志を育てるために、彼らにプライドの種(魅力的な言葉)をまき、「カッコいい男になれ!」、と叱咤激励する田原校長は、保護者の個別の要望で右往左往するのではなく、未来社会のために志ある若者を教育しているという高い自負を持たれているようでした。

学校が、どんな建学の精神を掲げているのか、どんな卒業生を育もうとしているのか、今の在校生の実態はどうか、保護者の期待はどこにあるのか、そのような学校の置かれている個別の状況によって、それに沿ってグランドループリックは作成されるべきです。分厚い歴史と、男子校ならではの「志を持ち主体的に生きる力」を教育目標にされている修道中高としては、「夢と誇りを持った志士を育てる私学」として、その自負とそれを反映したSBRがデザインされていることが確認できました。